

古代の地方史・地域史は、これまで正史、正倉院文書などを中心とした史料を用いた叙述が多かった。そこで、それらの史料が比較的残存する地域の場合は、豊かな地域史像を描くことも可能であるが、史料があまり残されていない地域の古代史はほとんど描かれてこなかったといえよう。

ところが、近年の木簡をはじめとした出土文字資料の発見や、自治体史の刊行、特に充実した内容の資料編の刊行によって、古代の地域に関する研究は増加してきた。それでも依然として史料の制約から、地域の民衆や村落などといった具体的な地域史像を描くという点において、古代地域史研究は中世地域史研究、近世地域史研究との隔たりは大きいといわねばならない。また、古代地域史の研究が増加し、著作物が多く刊行されている現在では、ただ地域社会の実態を描くだけではなく、方法論や史料論自体の再検討が必要であると考えられよう。

そこで本論文ではその一試論として、「中央」対「地方」という意識を相対化し、「地域社会」という概念を用いて、多様な地域の実態について明らかにすることを課題とした。

第Ⅰ部では重層的な地域社会の実態の一端を明らかにした。第Ⅱ部では、具体的なフィールドとして駿河国・伊豆国を選び、その地域性、分布氏族、祭祀と貢納、地域行政について検討し、ひとつの「地域モデル」を構築することを試みた。

まず、序章では近年の古代地域史研究に触れつつ、本論文の地域史研究の方法を述べた。本論文における「地域社会」概念は、多様な地域をとらえるため、人と人との関係をも含めた地域に用いることとした。そして、本論文では多様な地域を、「国家」という政治的権力によって制度的に設定された地域（これを「制度的地域」＝形式的地域と呼ぶ）と、歴史的に存在する地域、あるいは「制度的地域」の枠組みをこえたネットワーク（これを「歴史的地域」＝実態としての地域と呼ぶ）の二つからとらえることとした。

以上の方法論をもとに、具体的なフィールドを取り上げ、ひとつの「地域モデル」を構築することとした。この「地域モデル」とはひとつの地域を対象として、その地域の政治・経済・生活・文化について多角的に検討して地域的特質を明らかにし、そのうえでひとつのモデルを構築するものであるとした。「地域モデル」の対象とする地域には大小のまとまりが複数存在し、重層的な関係を形成しており、これは「制度的地域」と「歴史的地域」とで言い換えられるものであると述べた。

「第Ⅰ部 地域社会の諸層―重層的な地域―」は、序章で指摘した古代の重層的な地域の実態について検討したものである。

「第一章 律令国家の成立と地域社会」は、律令国家の成立が地域社会に与えた影響について、税制、地域支配の面から検討した。「第一節 「古代王権と贄」の展望」は、律令国家の成立が地域に与えた影響について、税制から検討した。律令制以前から国家成立以降にいたる贄の変遷を通じて、筆者の古代地域史に関する見通しを示したものである。その点で本論文の総説にもあたる。本節の課題は律令制以前の大王、王、地域首长への食料品を中心とした貢進を二へとしてとらえ、その特質を明らかにするとともに、二へが律令国家成立によりどのように変化していくのか明らかにすることとした。そこでまず、贄に関する従来の研究を概観した。近年の研究では律令制下の贄を租税の一部とし、国家財政のなかでとらえたり、「調」と「贄」の同質性を重視する傾向にあるが、逆に「贄」とは何か、「調」と「贄」との関係が不明確になってしまったと批判した。次に二への初源論からはじめて、律令制以前の二へについて検討した。その結果、律令制以前のタテ割り型、多様な支配関係を反映し、大王への二へに限定されない点に大きな特色があるとした。地域首长、中央有力豪族、諸王等にも献じられていた可能性を指摘した。その二へも天武・持統朝に天皇支配の正当性を示すために、ヤマト政権の屯倉・直轄地的地域における「伴造―部」の支配関係を基礎として「調」制に変化した。律令制下の贄については、天平期に嶋・浜・浦・海の記載のある「御贄」木簡が登場することに注目し、その時期に面期が見出せるとした。

「第二節 乙丑年木簡と「五十戸」制について」は、近年出土した奈良県飛鳥京跡の石神遺跡の乙丑年木簡を中心に、「評」制や「五十戸」制という七世紀の地域支配の一端について明らかにした。まず、乙丑年木簡の出土遺跡、木簡の形態、字形について検討した。次いで国、大山五十戸造などの記載内容について個々に検討した。そのうえで五十戸造について他の事例を含めて検討し、丁丑年木簡の「惠奈五十戸造 阿利麻」の五十戸造は役職だとした。丁丑年木簡では無姓者、乙丑年木簡では「大山五十戸造ム下ア知ツ」という部姓者が五十戸造であることから、史料が少ないものの、五十戸造には有力氏族ではなく新興勢力や有力農民が任じられていたとした。以上の検討を踏まえ、七世紀の地域支配について検討、庚寅年籍以前に部名の五十戸と地名の五十戸の二つが併存する意味について考察した。従来は部名（氏族名）から里名が成立したと考えられてきたが、逆に庚午年籍の段階で地名から氏族名が成立した場合もあったとした。さいごに里と五十戸の違いについて

ては、五十戸が大化前代の支配原理を継承する面が大きかった点にあるとした。つまり、天武四年（六七五）の部曲廃止以前は、評制が施行されても部民制、伴造制の支配を継承する面が大きかったとした。

「第三節 調庸布絶墨書銘と徴税機能―国印の押印箇所を手がかりに―」は、正倉院に伝存する調庸布絶墨書銘の検討を通じ、国衙や郡家の徴税機能の一端について明らかにした。調庸布絶墨書銘には、その貢進者、税目、貢進年月日等が記載され、その上に国印が押印されているが、本節では従来あまり注目されなかった国印の押印箇所を中心に検討した。まず、墨書部位ごとの押印の検討からは、国名・郡名の部分に押印する例が多く、戸主姓名や貢進年月日には比較的押印されている例が少なかった。印数・部位による類型化の結果、全体としては一類のものが多く、それらは国名・郡名に押印されているものが多かった。また、二類以上のものでも同様の結果であった。国別の押印箇所の分析からは、同一国内での押印箇所の傾向にばらつきのある国もあったが、常陸国で年次、郡をこえて印数・部位に共通性がみられた。そこで、同国では墨書銘への押印の方針が継承されている可能性があることを指摘した。墨書銘の年代による傾向については、貢進年月日の部分に押印する例は比較的早い時期のものにはみられるが、天平勝宝年間以降のものには少なかった。調庸布絶の長さ・広さ（布の幅のこと）及び専当国司・郡司名の記載への押印は、それらの記載がはじまる当初からみられるが、天平宝字八年（七六四）以降集中する。調庸布絶墨書銘の記載形式については史料制約から、必ずしも国別の記載形式の違いが明確になったわけではないが、常陸国の例などが、他国と異なる傾向にあることがわかった。以上の検討から国印押印箇所や墨書の国別の記載形式の違いは、各国の徴税における方針の違いを反映しているのではないかとした。

「第二章 ネットワークとしての歴史的地域」は、国郡制ではとらえきれない中央と地域、地域と地域との関係を析出した。「第一節 中央下級官人と地域社会―美濃国を例に―」は、大宝二年御野国戸籍も含めた正倉院文書、六国史、木簡などの古代史料から、古代美濃の氏族の特質を明らかにし、さらに美濃国出身の中央下級官人についても検討した。まず、『和名抄』の郡名、郷名を検討し、郡名を冠する氏族を郡名氏族、郷名を冠する氏族を郷名氏族と呼び、美濃におけるそれらの氏族の特質を明らかにした。その結果、まず、それらの氏族と中央との密接なつながりが見出せたのみならず、隣接する尾張国との人・物の交流がうかがわれた。次に郷名にはそこに分布する氏族のウジ名に因むものの他に、逆に地名から氏族名が生まれる場合があることを確認した。特に美濃の場合、地名＋勝とい

う渡来系氏族が多くみられることが特色であるとした。次に律令制以前、律令制下の美濃と中央とを結んだひとびとについて検討した。美濃は律令制以前からヤマト政権との関係が密接であり、トネリやモヒトリ（＝水取部）などが都と里を結んだ。律令制以降も都に比較的近いことから、都と里を結んだひとびとは多く、そのなかには正倉院文書にみられる写経生なども含まれ、彼らが写経生として出仕したり、出家する際には里の同族のつてをたどった場合も多かったことを指摘した。『和名抄』郷名の検討で郷名氏族には渡来系氏族が含まれることを指摘したが、渡来系の勝氏は不破郡、各務郡に多く分布した。国府所在郡の不破郡には地名を冠する勝氏が分布し、そのなかには国庁に出仕したものがいた可能性を指摘した。そして、各務郡は地形的制約から他郡と比較して開発が遅れたものと考えられるが、勝氏や秦氏などの渡来系氏族、村国氏などの様々な氏族により開発がなされたと考えられる。この各務郡には寺院のみならず郡レベル以上の施設がつけられ周辺の集落と大きく異なる景観を形成していたのではないかとした。

「第二節 封戸と郡司層」は長屋王家木簡のなかでも、従来文書木簡と比較して研究が少なかった荷札木簡を中心に、荷札木簡と封戸との関係について考察した。まず、長屋王家木簡の荷札木簡で特徴的なものを取り上げ、そのうえで記載が簡略なものが多いこと、国名・貢進者・年月日を記載しないものが多いことを指摘した。荷札の記載の簡略さから、封戸からの米などの品目は国衙や民部省を経ずに直接的に給主にもたらされたものもある可能性を指摘した。ただし、直接的とはいえ、郡司層が進上に大きく関与していたことを確認した。さらに「長屋親王宮」などの宮名の記載がある「宮号」荷札の分析を行い、宮の本土は長屋王本人と高市皇子の宮を伝領したものの二つが主なものであることを確認し、その郡司層と宮との関係は高市皇子以来の関係である可能性を指摘した。

「第Ⅱ部 地域モデルとしての東海地域―駿河・伊豆を中心に―」では、令制の駿河国・伊豆国を中心とした地域をフィールドとして、ひとつの「地域モデル」を提示することを試みた。具体的には、当該地域の律令制以前の氏族の動向や、三嶋神社を中心とした神祇信仰と二への問題、さらに二へから変化した駿河国・伊豆国の調堅魚（鯉）貢進の実態について検討した。

なお、本論文では、第一章第二節で詳述したように、当該地域を四つの地域ブロックとしてとらえることとした。

「第一章 律令国家の成立と東海地域」では、主に律令制以前の駿河・伊豆の地域について検討し、さらに当該地域が国家成立によりどのように変化していくのか論じた。第Ⅱ

部の導入にあたる「第一節 駿河国・伊豆国の地域性」では、まず、駿河・伊豆の地域も含まれる「東国」とヤマト政権との関係について研究史を概観し、従来の研究が「東国」がヤマト政権から自立的か、従属的かという点に論点が集中していたことを批判した。そのうえで近年の駿河・伊豆の地域に関する研究にも触れた。

次に駿河国・伊豆国の地域性について、従来から知られている史料を中心に概観した。まず、両国は伊豆国が天武九年（六八〇）に駿河国から分置される以前は一体の地域であった。両国は『延喜式』の規定によれば、正調である繩、高級繊維製品も貢進することになっていたが、調雑物の堅魚が主要な貢進物であった。同じく『延喜式』によれば、駿河国は比較的農業生産力が高かったが、伊豆国は正税が六万五千束であり、農業生産力も低く、耕作可能な地域も田方郡の狩野川流域に限られていた。そのような違いがあるが、両国は律令制下の主要な堅魚貢進国であり、海上交通の要衝であったとした。

「第二節 駿河・伊豆の国造・部民・評」は、第一節で明らかにした地域性を踏まえ、八世紀の史料を中心として当該地域の氏族分布を明らかにし、さらに六、七世紀の部民制の時期の氏族分布について適及的に復原することを試みた。便宜的に令制の駿河国・伊豆国に分けて検討し、さいごに両国の分布氏族と、その性格について比較検討した。その結果、駿河国の氏族分布については、①名代・子代・舎人は五世紀設定の可能性のあるものも含まれるが、六世紀以降に設定されたものが多い、②名代・子代・舎人は駿河国でも東部の駿河郡・富士郡に多く分布する、③臣姓・君姓の地域豪族層は西部の郡に比較的分布している、④東部の郡（駿河郡・富士郡）は伊豆国の氏族と共通する氏族が多い、⑤駿河郡・富士郡では大伴部・穴人部など食膳奉仕氏族が分布している、⑥東部の郡では上宮王家との関係が深い、という特色が明らかになった。一方、伊豆国は①名代・子代は四、五世紀設定のものもあるが、その設定時期については、問題が残る、②名代・子代・舎人は田方郡を中心に分布している、③全体的には部姓のものが多い、④田方郡の氏族は駿河国駿河郡・富士郡と共通の氏族が多い、⑤田方郡には大伴部・穴人部が多い、⑥田方郡では上宮王家との関係が深い、⑦賀茂郡では分布氏族の大半が矢田部である、⑧那賀郡では物部が多い、という特色が明らかになった。このなかで②④⑤⑥については、駿河国駿河郡・富士郡と伊豆国田方郡とは律令制以前には一体の地域であったのであり、珠流河国造の勢力範囲であったことと関係があるとした。以上の氏族分布の特色をもとに、本節では律令制以前の駿河・伊豆の地域を、①廬原国造の支配地域、②珠流河国造の支配地域、③④の地域に準じる駿河国西部の志太郡・益頭郡の地域、④廬原国造、珠流河国造

の支配の及ばない伊豆半島、という四つの地域ブロックとしてとらえた。②と③の地域は共通性を持ち、名代・子代や舍人が多く分布していることが特色である。この地域には六世紀頃に稚贄（ワカニヘ）屯倉が置かれ、それが契機となり名代・子代も集中的に設定されたとした。その名代・子代の管理には国造の一族があたった。そして、七世紀には壬生部が設定され、ヤマト政権や上官王家との関係が密接となった。また、①から③の地域に含まれない伊豆半島南部の地域には、のちに伊豆国賀茂郡が置かれるが、この地域はマウンドを伴う古墳も築造されず、祭祀遺跡が多数確認されている地域であった。伊豆半島南部には、七世紀以降一括して矢田部、宇遲部が設定された地域で、ヤマト政権の直轄的地域となったとした。七世紀に皇室直属民を集中して設定できたのも、①や②の地域と異なり、それまで地域豪族の勢力も及ばず、中央豪族の部曲なども設定されていなかったためとした。

「第三節 伊豆国の堅魚貢進と伊豆三嶋神社」では、伊豆三嶋神社の祭祀の原型と伊豆国の調堅魚貢進との関係について検討した。まず、伊豆三嶋神社の祭祀の原型は海上交通の要衝である伊豆半島、伊豆諸島の在地神としてのミシマ神で、律令制下伊豆国の調堅魚貢進の起源はそのミシマ神への二へであるとした。次にミシマ神への二へが、律令制以前のある時期（七世紀前半）に膳臣と膳大伴部の「伴造―部」の関係により、中央へ二へとして貢進されるようになり、飛鳥浄御原令施行（七世紀末）以降租税としての調に変化したとした。なお、伊豆三嶋神社の祭神の大山祇命と摂津、伊予の大山積神との関係は、応神、仁徳朝までは遡らず、『伊予国風土記逸文』の大山祇命の伝承や記紀の枯野（軽野）伝承には、斉明朝の百済救援の際のひとびとの記憶が反映されているとした。

「第二章 駿河国・伊豆国の堅魚貢進と地域行政」では駿河国・伊豆国の調堅魚貢進を中心に検討し、当該地域の堅魚貢進と地域行政の実態について明らかにした。

「第一節 伊豆国の荷札木簡と（膳）大伴部」は、平城京跡出土の伊豆国の荷札木簡を中心として、その堅魚貢進の特質を明らかにした。まず、荷札木簡そのものの検討を行い、そのうえで荷札木簡にみえる貢進者から、同国の氏族分布について検討した。その結果、部姓のものが多く、名代・子代も多くみられ、律令制以前の伊豆国はヤマト政権と密接な関係にある地域であったことが明らかになった。分布氏族のなかでも大伴部は、律令制以前に食膳奉仕氏族の膳臣と「伴造―部」の関係にあった膳大伴部であった可能性が高く、当該地域の堅魚貢進と深く関わっていたとした。そこで伊豆国は律令制以降も調の堅魚貢進国として律令国家から期待されることになるとした。ただし、律令制下の堅魚貢進はそ

れ以前とは異なり、堅魚を煮る大型の埴である埴形土器を税物生産に用いることになった点で技術革新もみられ、そこに租税としての堅魚の貢進制度の確立が認められるとした。

「第二節 駿河国・伊豆国の荷札木簡と堅魚貢進」は、第一節で取り上げた伊豆国と大きく関わる駿河国も含めた両国の調堅魚貢進の実態について検討した。史料としては、駿河国・伊豆国の荷札木簡を中心に扱った。まず、荷札木簡の検討からは、郡毎、郷毎の書式、税目、品目等の相違がみられた。さらに、徴税機能における郡家の役割も大きかったことが明らかになった。そのなかで国府所在郡であり内陸の駿河国安倍郡からの海産物の貢進にも注目し、その貢進には交易による税物調達が行なわれていた可能性を指摘した。以上の検討の結果、問題として残るのは、書式の郡毎、郷毎の相違と荷札の作成段階との関係であり、伊豆国那賀郡の例により郷段階から郡段階という段階的な荷札の作成を想定する寺崎保広氏の説にも問題があるのではないかとした。近年の山中章氏による荷札木簡の製作技法の検討によれば、郷毎の相違が大きいとの結果がある。本節の検討でも郷毎の記載内容や書式の相違は認められた。ただ、郷毎の相違を認めるとしても、戸主、戸口の記載方式なども含めた徴税機能における方針には、郡家で決定されたものも多かったのではないかとした。さいごに堅魚を煮たと考えられる埴形土器の出土遺跡の分布からは、郡段階以上の大規模な生産体制が想定される遺跡と、郷単位の遺跡があったことも指摘した。

「第三節 駿河国安倍郡の郷名氏族」は、天平九、一〇年駿河国正税帳にみえる横田臣・半布臣・川辺臣などといった『和名抄』の安倍郡の郷名を冠する氏族に注目した。まず、これらの氏族を郷名氏族と呼ぶこととした。この郷名氏族は同正税帳によれば、「当国使安倍郡散事」などとみえ、郡家や国庁へ出仕していた。郷名氏族の本拠地と思われる横太郷、埴生郷、川辺郷は国庁近くに比定され、以上の郷には主として郷名氏族が分布していたものと考え、国庁付近の各郷からは国府の下級官人を多く出していたものと想定した。安倍郡は国府所在郡であり、他郡と比較して国庁周辺の郷は国庁の下級官人を輩出する集団としての郷名氏族が所在したものとした。安倍郡は第二節でも指摘したように、税制の面でも他郡が中央へ調として堅魚を貢進しているのと異なり、堅魚煎（カツオの煮汁）を中男作物として貢進しているという違いがみられた。このような税制面での違いは安倍郡の国庁周辺に下級官人が集住するという国府所在郡としての性格とも関わるものとした。

終章では、二部にわたる本論文をまとめ、今後の課題をあげた。第一部では律令国家の成立が地域社会に与えた影響について検討したが、国家が成立しても庚寅年籍以前の地域支配には、伴造制、部民制的性格が残存していたこと、封主としての長屋王と封戸との貢

納関係に高市皇子以来の関係があった郡司層が介在していたことを指摘した。第Ⅱ部では駿河・伊豆を具体的なフィールドとして、ひとつの「地域モデル」を構築することを試みた。そして、当該地域を四つの大きな地域ブロックでとらえることとした。この地域ブロックは「歴史的地域」のひとつと考えられる。なお、終章では本論で取り上げることができなかった伊豆国田方郡の小さな地域ブロックについて略述した。

さいごに終章では、今後の課題として、第一に本論文で析出した「歴史的地域」が中世以降どのように変容していくのかということ、第二に本論文では地域間交流については中央と地域との関係を中心に論じたので、伊豆と安房との関係のような地域と地域の関係を検討すること、以上の二点をあげた。